2015　July　No. 76　（7月１日発行）

新九郎通信

発行　小田原市栄町２−13−３（株）伊勢治書店３Ｆ　ギャラリー新九郎　　木下泰徳
メール配信サービスご希望の方は右記アドレスへお申込みを e-mail:kinoshita@iseji.net

よく展覧会に足を運んだ６月だった。丹沢アートフェスに平塚市美術館、横浜美術館に川崎市市民ギャラリー、国立新に芸大美術館、ふらっと立ち寄るギャラリーやご案内いただいた知り合いの展覧会も含めると３０近い。どれも「一期一会」と多少無理をしても時間を割いてしまう。アートの遠出は疲労感がないどころか元気をもらうから不思議だ。展覧会にかけた作家のエネルギーを思うと、つい忘れがちになる日常に返る前にDMの裏や手帳にメモを書き留めるようにしている。
７月の新九郎も、１３回目となる「街展」始め、「一期一会」の展覧会が皆さまをお待ちしています。

新九郎　７月の展覧会のご案内

	会　期 展覧会名	見どころ
	7/1（水）～7/6（月） 第７回らくらくてん	会員 15 人、油彩・水彩等 人物・風景等自由な画風のグループ展
	7/8（水）～7/13（月） 写真展　四季の風景 風景歳時記	画像館の写真仲間が長年撮り貯めた作品の中から厳選した風景写真、春夏秋冬四季の彩り
	7/16（木）～7/20（月） 第 13 回　街展	銀座通り五つの画廊で同時開催。アオキ・飛鳥・ツノダ・コットン倶楽部・新九郎
	7／17（金） 新九郎デッサン会	どなたでもお気軽にどうぞ！ 18:15-20:45　会費 1500 円 コスチューム、固定ポーズ
2015 夏休み こどもフェスティバル	7/22(水)～25(土) 7/28(火)～31(金) 8/3(月)	申込：1F レジカウンター 問合せ・電話受付 0465-22-1366 お申込先着順となります

近隣・友の会会員の展覧会情報

会期・展覧会名	会　場
7/16（木）～7/20（月） 第 13 回　街展	アオキ画廊、飛鳥画廊 ツノダ画廊、コットン倶楽部、新九郎
7/13（月）～7/20（月）火休 内なるコトバ　たますかす	清閑亭 0465-22-2834
7/29（水）～8/3（月） 2spophotography	飛鳥画廊 0465-24-2411
7/9（木）～7/13（月） 第４回　こみね展	アオキ画郎 1F・2F 0465-22-0825
7/14（火）～7/19（日） ネパールに想いをよせて展	丹沢美術館 0463-83-9550
7/15（水）～7/20（月） 23th サークル DON 会員写真展	西武小田原店 4Fｷﾞｬﾗﾘ 0465-49-7111
7/1（水）～7/11（土） -日本の山々-山行写真展	ぎゃらりーぜん 0463-83-4031
7/1（水）～7/10（金） 写遊会　写真展	小田原ﾌﾗﾜｰｶﾞｰﾃﾞﾝ 0465-43-2569
7/14（火）～7/20（月） 第 10 回写真展	平塚市美術館市民ｷﾞｬﾗﾘｰ 0463-35-2111

東海道五十三次　23　関宿

5 年をかけ、足で歩いたスケッチ紀行　松野光純

古代三関の一つ「鈴鹿の関」が地名の由来。宿場の「東の追分、西の追分」には、伊勢別街道や大和街道の分岐点もあり、古くから交通の要衝。関宿の街並は、歴史的景観の保存に力を入れた町づくりが成功した例と言われている。「関の地蔵に振袖着せて奈良の大仏婿にとろ」の俗謡で名高い。

天平１３年(741)行基菩薩の開創と伝えられ、我が国最古の地蔵菩薩の霊地である。今の本堂は、元禄１３年(1700)の再建で、本堂及び隣接する鐘楼と愛染堂は、国の重要文化財に指定されている。女性に愛を得させてもらい、商人は商売繁盛を得るといわれている。

思うことなど　横井山 泰

三島のエクリュの森の紹介で、静岡県富士市にある東名富士クリニックのアートコーディネートをすることになりました。東名富士インター近くにある透析専門の病院です。以前から患者さんやスタッフの皆さんの気持ちを元気にするために作品展を開催されていたのですが、6 月から僕が企画を担当させていただきます。静岡県出身の作家の展覧会、という希望もあり、静岡県にゆかりのある方々に出品のお願いをさせていただきます。その時は是非、お力をお貸しください！！「作品で元気になって欲しい」という理事長先生、やはりアートにはそういう力があるのです。ともすれば独の世界で完結してしまう作品。そうではなく誰かのお役に立てる作品は素晴らしいな。小乗でなく大乗。などなどと考える梅雨です。7 月からは非常な才能があるのに多摩美を出てから一度も発表をしていない高校時代の　　先輩の立体と僕の平面を展示します。患者さんスタッフさん先輩がハッピーになりますように。

小田原では 7 月 13 日から 20 日まで清閑亭で Conte さん主催のグループ展に参加します。久しぶり清閑亭に作品を展示します。また、同会場で 19 日 15 時からアトリエ大家さんの尺八奏者、川口蛍堂の演奏がありますので是非！！僕もトークで参加します。

加藤恭夫展ギャラリートーク　ギャラリー楓　秦野市

新九郎通信で１０回にわたり「小田原街並み再発見」のシリーズを連載頂いた加藤恭夫さんの展覧会が、秦野のギャラリー楓で行われました。窓の外はのどかな田園。ピアノにソファー、コーヒーの香りのする居心地の良いギャラリーは、まるでご自宅にお邪魔したようで、参加者は目の前の作品と加藤さんの話に耳を傾けながら、くつろいだ午後のひと時を楽しみました。

テーブルにはおしゃれな資料が準備され、長年描き続けている北海道の風景を中心に、スケッチの楽しさ、旅先でのエピソード、創作のこだわりなど、ユーモアを交えたわかりやすいお話に、予定していた１時間はあっという間でした。気軽に参加したギャラリートークでしたが、終わってみるとまるで１本の映画を見たような充実感に包まれ、なぜか感動で胸がいっぱいになっていました。

加藤さんは、奥様の故郷でもある北海道を一人で度々スケッチに訪れていました。作品に登場する雄大な大地や気持ちの良い風景は、レンタカーを使い、わざとわき道を行く中で出会った貴重な景色でした。雪の多い冬は、歩いて回るというストイックなスケッチをしていることも驚きでした。作品の前に立って感じた心地よい解放感は、こうしてやっと見つけた風景に感動した想いが形になったという事が改めて伝わり、これからの作品をみせていただく楽しみがふえました。広く大きな心ですべてを包み込む豊かな自然に魅せられ、普段気付かないものに気づかせてくれる自然からたくさんの息吹をもらっていると語る加藤さんが、北海道を愛する理由がわかった気がしました。

いつも感心するのは、観る人を大切にされた展示です。ギャラリーの入り口には、お仕事で育てているというクリスマスローズ、シクラメン、パンジーの作品が出迎えてくれました。お花の咲く庭を散歩するようなプロムナードの空間から展示室に入ると、天井からの自然光に包まれた５０号の「岬への道」（襟裳）がすごい存在感でかかっていました。死角となる壁には抽象画と人物画で変化を持たせ、冬のトーンが多い作品のコーナーには緑のスケッチを配しているのも観る人への配慮と知りました。紙の白と余白を生かした透明水彩のスケッチ。同じ大きさの作品や同じ額の作品が２点あったのも意図的でした。同じようなものを２つ並べるのは、観る人に安心感があるからというお話しでした。明暗、曲線と直線、光と影の対比などを含む作品と自然な対話ができるこの空間は、「観る人が主体」という加藤さんのおもてなしでもありました。

広大な大地をスケッチしながら旅し、今や土地の人より北海道には詳しいと笑う加藤さんは、また北海道が大好きだった「高倉健」が好きで、健さんの映画に出てきた町もよく巡っているそうです。

作家と言えども、長く描いていると自分のクセには悩まされるようです。概念にとらわれることなく、自由な発想で描き続けていきたいと、加藤さんは様々な努力をされていました。花を育てていることもその一つ。クリスマスローズの毒で手が腫れ上がってしまったことも、可憐に見える花のもつ強い生命力だと受けとめていました。また、広がりのある絵を描きたいと、肘をつかずに書く「写経」もいい訓練になると続けていました。そして、人の心に響く自分の色、自分らしい色を求めていきたいと、これからの課題に「色」をあげました。「広がりのある風景を常に『憧れ』をもって描いていきたい」とトークの中で度々登場した『憧れ』というキーワードで締めくくった加藤さんは、まるで少年のように輝いて見えました。

ギャラリートークの終わりに、私の中に変化が起きていました。同時代を生きる加藤さんの心豊かに生きているパワーに、圧倒され感動してしまったのだと思います。今回の企画は、３０年前加藤さんの展覧会を見てからずっとファンになったという方の企画で実現したものでした。「一生憧れの存在で永遠の師匠」と語る司会の方は、加藤作品について「人柄の広がる人間在っての作品」と評されたことに、参加者は一様にうなずいていました。

（新九郎友の会　木下和子）

絵てがみ折々　―小田原の暮らしの中で―

野地　三恵

今年もわが家のカールドンが咲いた。アザミに似た大きな花で、近寄ると甘く強い香りがする。蕾も枝分かれしていて、これから７月末くらいまで、次々に咲きそうだ。丈が２メートル近くにもなる。葉も大きく茂って、いかにも存在感がある。

今から１５年ほど前に、友人からポットに入った小さな苗を貰ったのが始まりで、それ以来の縁だ。虫がついたり台風に倒れたりしながらも、ようやく安定して育てられるようになった。この花は地中海沿岸が原産で、アーティチョークの原種と言われる。アーティチョークと同様に蕾が食用になるらしいが、まだ食べたことはない。もっぱら梅雨時の庭の彩りを楽しんでいる。

6月のこと

●丹沢アートフェスティバルに初参加した。地域のアーティスト、アートファンが集って始めたもので、今年で 9 回目を迎えた。行政の支援を受けず、自主的に開催している。6 月の丹沢アートフェスティバル反省会に参加したがとても和やかでよい雰囲気だった。千元屋さんが事務局となっており、場の提供と共に推進役として重要な役割を果たしているように感じた。足柄アートフェスティバル Vol.0 の時、千元屋さんご夫婦が「ソウセイカフェ・びるぼっくり」の展示を見に来られ、とても熱心に見ていかれたのをよく覚えている。アートを大切に思う人達が集まり、信頼でつながれていることが実感できた。「7000 円の参加費で 1 カ月間こんなに楽しめるのだから！」という参加者の声が心に残った。

●画楽 60 年　渡辺豊重展（川崎市市民ミュージアム）
初めて訪れたミュージアムである。庭に５ｍはあろう巨大な釜のようなオブジェがあり、誰の作品なのか気になり確かめた。NKK の鉱炉であった。その黒々とした圧倒的な存在感は現代アートも顔負けだ。
渡辺豊重は川崎の工場で働きながら絵を描いていたが、美術研究所で難波田龍起や中谷泰に学び、田中岑に影響を受け画家として独立する。作品は自由でおおらかでユーモアのある形と明快な色彩で描かれている。元永定正を思わせるカタチがあったり、タイトルも《赤いモクモクと緑の長四角》のように共通するところがある。東日本大震災に衝撃を受け、一転して黒一色で鬼をテーマにしたシリーズを描く。３ｍの大画面からは自然の抗いようのない巨大な力を感じた。会場では作家にインタビューしたビデオが見れる。84 歳でなお現役、若々しく物事にこだわらない魅力的な人物だ。「観る方が自由じゃないと、現代美術っていうのは面白くないよね。」と語っている。㊍